



# 日本ラテンアメリカ学会

## 会 報



AJEL

2005年3月7日

AJEL

No. 86

### 1. 理事会報告

#### ○第110回理事会

#### 2. 第26回定期大会のお知らせ

#### 3. 研究部会報告

#### 4. 研究部会開催案内

#### 5. 近著紹介

#### 6. 海外のラテンアメリカ関係 学会のお知らせ

#### ○CELAOおよびFIEALC 次期大会のお知らせ

#### ○LASA 2006年大会のお知らせ

#### 7. 事務局から

### 1. 理事会報告

#### ○第110回理事会

日 時：2005年2月5日（土）14:00-17:00

場 所：早稲田大学14号館10階1054会議室

出席者：逕野井（理事長）、小泉、堀坂、落合、鈴木、畑、宇佐見、岸川、幡谷（書記）

欠席者：松下、辻、加藤

#### <報告事項>

1. 学会事務センターの破産について：理事長より前回理事会以降の経過報告があった。

1) 9月27日、学会事務センターにて会計資料を受領し、当学会の債権が115万6583円と確定した（後日、これに基づき債権届出書を提出）。民事再生の申し立てを行った8月6日から破産宣告を受けた17日までに、センターに入金した当学会会費5万600円は10月末を目途に返還されることになった。

2) 10月4日、「日本学会事務センターの破

産とそれに伴う事務体制の変更について」の文書を会員に送付した。事務局での新事務体制が本格始動した。

3) 10月21日までに、学会誌『研究年報』が返還された（スペースの都合で筑波大学、上智大学、アジア経済研究所、京都外国语大学の4箇所に分割保管中）。学会事務センターが保管していた原簿・資料等の、破産に伴う返還作業はこれすべて終了した。

4) 11月27日、被害者学会連絡協議会第一回会合が開かれ、宇佐見理事が出席した（東京大学理学部）。協議会の目的は、①破産の経緯を明らかにする、②責任の所在を追及するための法的措置の検討、③被害学会の活動の遅滞を取り戻す方策の検討の3点。

5) 11月29日、第一回債権者集会が東京地裁で開かれた（理事長出席）。破産管財人の側から次の報告があった。

・届出債権額に基づく負債総額は約20億8500万円、一般債権の内、学会関係の債権は11億3800万円である。現金は3億4000万円で今後約1億円の回収の見込みがあるが、給与等の優先債権が3億3800万円、公租公課が2900万円あるため、一般配当の見込みはほとんどない。

・破綻に至る6月21日～7月26日の間に、112学会に対し6億5000万円の送金が行われたが、この預かり金の返還に関する法的措置を講ずることは困難と判断した。

・旧理事等から責任を認め損害賠償として5000万円ほどの私財提供の申し出が学会に対しなされている。これは和解の申し入れであり、被害学会としてこれを受け容れるか、分配方式をどうするかについて統一見解をまとめよう

要請する。

- ・次回債権者集会は3月7日開催。
- 6) 12月29日、理事会としての意見集約を経て、連絡協議会に加入届けを送付した(1月21日現在、当学会を含め60学会加入)。
- 7) 1月7日 旧理事の私財提供の申し出に対し、賛同する学会を広く募るため「連絡協議会の活動と目的を同一にせず」別途、和解交渉委員会を発足させたので、和解に応ずるか、また分配方式をどうするかの回答を問う連絡協議会代表幹事と破産管財人の文書が届き、Eメールにて理事会としての意見集約を行った。

1月25日、損金を少しでも回収することが必要であるとの観点から、①和解に応ずる、②分配方法は平成16年6月21日以降に預かり金の返還を受けた学会に対しては和解金を分配せず、それを除いた全学会の預かり金残高総額に占める当学会の預かり金残高の割合に応じて分配することを希望する旨の回答書を送付した。なお破産の責任がより重く、私財提供を申し出でない元専務理事らについては、引き続き連絡協議会を通じて法的措置を検討していくことになる。

## 2. 事務局：

- 1) 地域研究コンソーシアムの年次集会が12月17日に開かれ、理事長が出席した。コンソーシアムの活動内容について会報等で会員に周知することにした。
- 2) 日本学術会議に地域研究関連の分野別委員会の設置を求める要望書を地域研究学会連絡協議会に加盟している学会の連名で提出することとした。

## 3. 学術会議：

10月21日の地域研究学会連絡協議会、1月24日の文化人類学・民俗学連絡委員会に基づき、2005年9月全面改組され発足する日本学術会議(20期)の改革の現状と、従来の研究連絡委員会がなくなることに対する学会の対応について報告があった。

## 4. 研究部会：

12月21日に東日本部会が開催され、報告者3名に対しコメントーターを立て活発な討議があった。次回は3月19日を予定し

ている。

## 5. 第26回定期大会：

現在3パネル、12名の発表申し込みがある。シンポジウムは伊豫谷登士翁氏を中心、「越境」、ないし「移民」として企画中である。特別講演のための招聘者は未定。

## 6. 研究年報の編集：

13本のエントリーの内10本投稿があり、その内3本が掲載予定として検討中である。未完成原稿での投稿が目立つので、院生が投稿する際は、指導教員などによる論文執筆指導が必要であり、周知していきたい。年報の印刷については、複数の印刷所の見積もりをとって実施することとした。

## 7. 会報の編集：次期会報は3月1日刊行予定である。

### <審議事項>

#### 1. 学会事務センター破産問題

- (1) 回答期限の関係で、Eメールを通じた意見集約の後に執行した2件につき承認した。
  - 1) 被害学会連絡協議会への加入と当面の法的費用3000円の負担について。
  - 2) 和解委員会への回答について(報告事項1-7を参照)。
- (2) 学会事務センター破産に係る損金の発生について、決算処理に向け必要とされる税理士等との協議に係る支出が承認された。

#### 2. 堀坂理事の海外長期滞在に伴う理事の補充について。堀坂理事より、海外滞在期間が継続する6ヶ月以上にはならなくなつたので理事の業務に支障がないよう継続したいとの表明がなされ、補充を行わないことが了承された。

#### 3. 入退会の承認。4名の入会と6名の退会が承認された。長期海外滞在で会費未納のため除名となっていた元会員の再入会が、未納会費(7年間)を納入することを条件に承認された。

#### 4. 事務局の運営委員として新木秀和会員、竹内亘理会員、箕輪真理会員を承認した。年報の運営委員として、谷洋之会員と柳

原孝敦会員を承認した。

5. 定期大会の実行委員に新たに野谷文昭会員、上谷直克会員を加えることが承認された。これで実行委員は、山崎眞次会員を委員長に、畠恵子、森本栄晴、後藤雄介の各会員と合わせ計6名となった。
6. 4箇所で保管中の在庫年報の処理について審議が行われ、先ずは所蔵していない図書館など機関を対象に希望を募ることとし、その他残部については継続審議とした。

## 2. 第26回定期大会のお知らせ

2005年6月4、5日、早稲田大学西早稲田キャンパスにて大会が開催されます。1月末現在で報告申し込みは3パネル、個別発表が12名です。大会実行委員会では引き続き報告者の募集をいたしております。報告を希望される会員は3月25日までに、下記の項目を明記の上、お申し込みください。

- ・氏名（所属）
- ・報告タイトル
- ・個人発表、パネル発表の別
  - \* パネルの場合には、パネルのテーマ、報告者全員の氏名と報告表題をお知らせください。
- ・報告要旨（プログラム用）A4で1枚以内（要旨本文は1200字以内）
  - \* 報告要旨に関しては3月31日までにご送信いただければ、結構です。

連絡先 畠恵子 hata@waseda.jp、

T/F 03-5286-1413

## 3. 研究部会報告

### 東日本部会

2004年12月11日、早稲田大学で研究部会を開催した。3時間半にわたり、報告とそれについての活発な議論が行われた。参加者は15名。

○倉田量介（東京工業大学大学院）「アフロ性をめぐる全体化と断片化：20世紀前半、キューバにおける「民俗」音楽の輸出商品化をどう考えるか

○増山久美（上智大学大学院）メキシコ市大衆地区における近住拡大家族

○浦部浩之（愛国学園大）2004年ペネズエラ大統領罷免国民投票：米州機構（OAS）国民投票監視団に参加して

倉田報告は「アフロ性」を謳う音楽が商品化された背景を、供給者と消費者の間に位置する仲介者、メディアに着目して分析した。主に国内の自文化の模索、「民俗」音楽、黒人内の差別化との関連で「アフロ性」が捉えられたが、国民文化としてのアフロ性の称揚（全体化）と断片化（差別化）のプロセスについての質問や、米国の音楽産業・市場分析の必要性の指摘などがあった。

増山報告は自身の調査に基づき、統計上あらわれにくい「近住拡大家族」という概念を用いて、低所得層の家族の紐帶の要としての女性の役割を明らかにした。参加者から家族よりも隣人関係の重要性を示唆する事例の紹介や、積極的存在と女性の活動を評価する報告者に対してジェンダー視点の必要性を指摘する意見があった。

浦部報告では、写真を用いながらペネズエラの政治危機の背景と選挙監視活動の具体的な内容、問題点が分析された。オブザーバーの人数の少なさと正統性の保証、パソコン導入の経緯、チャバス政権の性格づけなどについて質問があったが、個人的には、タッチスクリーンを利用した電子投票の導入と「あまりにも作業が非効率的」という報告者のコメントの対照性が印象に残った。

（畠恵子）

### 中部日本部会

11月20日（土）14時から17時に南山大学名古屋キャンパスD-22教室にて開催。参加者16名。若い研究者が半数以上を占めた。部会での報告内容は以下のとおり。

○「ラテンアメリカのジャボニスム—エンリケ・ゴメス・カリーリョを見る日本へのまなざし—」浅香幸枝（南山大学）

グローバル化の進展する今日の国際社会において、異文化を理解し、多文化共生することは急務である。親日のラテンアメリカの日本イメージ形成に果した、グアテマラ出身のエンリケ・ゴメス・カリーリョ

(1873年－1927年)の役割は大きく示唆に富む。近代主義を模索したゴメスは、ジャボニスム全盛のパリに住み、日本文化に創作活動の源泉を見出す。文学作品だけでなく、スペイン語圏の新聞・雑誌に記事を送る売れっ子である。解釈によっては偏見にもつながりかねないことをゴメスは「共感」しながら異文化理解を試みている。「共感」の作法のあり様は今日においても説得力がある。詳細については、拙著「ラテンアメリカのジャボニスム—エンリケ・ゴメス・カリーリョに見る日本へのまなざし—」『ラテンアメリカの諸相と展望』(南山大学ラテンアメリカ研究センター編、行路社、2004年12月)をご覧いただければ幸いである。

○「インカの追い込み獵<チャク>(ビケーニャの捕獲)の復活をめぐる諸問題」稻村哲也(愛知県立大学)

インカ帝国では皇帝が自ら催す「チャク」と呼ばれる一種の追い込み獵があり、数万人が隊列を組んで動物を追い込んだ。特に毛の質が良いビケーニャは、毛を刈ったあと生きたまま解放し、その毛は皇帝に献上された。チャクは野生動物を合理的に利用し管理・保全する優れたシステムであったが、インカ帝国の滅亡とともに崩壊し、野生動物は乱獲され激減した。しかしフジモリ政権下の1993年に、パンパ・ガレーラス高原でインカ時代を偲ばせるチャクが復活した。本報告では、現代版「チャク」の実態を紹介し、復活の経緯・背景を明らかにするとともに、チャクが原毛から得られる大きな現金収入となり、それが野生動物の価値の再評価と保全につながり、先住民の歴史と伝統の再評価を促し、先住民コミュニティの連携やリーダーシップなどに大きな変化をもたらしていることを明らかにした。

○「ポサダの描いたノタ・ロハ—都市労働者のもとめた残虐性とモラル—」佐原みどり(名古屋大学大学院)

カラベラ(骸骨)シリーズで人気のあるメキシコの版画家ホセ・グアダルーペ・ポサダは19世紀末から20世紀初頭にかけて多く

の労働者向け新聞の挿絵を手掛けた。本発表で取り上げたのは、とくに読者に好まれたノタ・ロハと呼ばれる災難記事に関するものである。ポサダが描いたノタ・ロハの内容は天災、事故、超自然現象、犯罪、刑罰などに分類され、それぞれの記事から都市労働者たちの日常生活と想像力、罪の捉え方とモラルの意識(犯罪者の典型、英雄の典型、社会・宗教的道德)、都市から地方へのまなざしや都市の混乱の様子(近代化のひずみ)、マチスモ社会における死の意味合いなどを読み取ることができる。悪徳への報復としての天災や、犯罪者たちの復活のない死を想像力を駆使して描き出したノタ・ロハは、カトリック教理の延長線上にあり、暴力の糾弾という機能を持っていたと同時に、宗教や政治が提示する絶対的な善悪を超える民衆の娯楽でもあった。

中部地区に限ったことではないが、大学院の数も入学定員も増加し、大学間の垣根もずいぶん低くなった。最先端の研究を発表する場が学会であるのはもちろんだが、学会は同時に若い才能を見守り鍛えていく場もある。だから、若い研究者(あるいはそのタマゴ)も、ただ参加するだけでなく大いに発言し議論に加わって欲しい。関西や関東での研究会を見ると若い人たちの元気な活動がめざましく眩しいほどである。ラ米研究の将来を担う中部地区の若い有望な研究者たちに心からエールを送りたい。

(加藤隆浩)

## 西日本部会

2004年12月4日(土)午後1時から京都外国语大学京都ラテンアメリカ研究所にて、西日本部会が開催された。

(1)中村報告では、アルゼンチンの女流詩人ストルニイを取り上げ、モデルニスモ詩人という評価に対し、さまざまな表象を用いてロマン主義詩人として位置づける。(2)小林報告は、メキシコ・トラパネコ社会において聖人サン・マルコスがいかに豊饒のシンボルになったかを祝祭日の儀礼をつうじて分析した。(3)佐々木報告では、ニカラ

グアにおける先住民共同体の変遷過程を行政・法・治安の観点から分析し、その存続可能性を超法規的な管理形態に求めている。

今回は関西の有志による「ラス・アメリカス研究会」との合同研究会となり、当学会員と合わせて16名が参加した。司会は運営委員の小澤卓也会員が務め、なごやかななかにも活発で有意義な議論ができた。報告要旨は以下のとおりである。(辻豊治)

(1)中村多文子(京都外国語大学大学院)

「詩人アルフォンシーナ・ストルニイ(1892-1938)のロマン主義に関する一考察—“Han venido ...”(Languidez, 1920)を中心にして—」

本発表では、スイス移民の子で、アルゼンチンで育った詩人アルフォンシーナ・ストルニイの第4作Languidez (1920) 所収の“Han venido ...”におけるストルニイのロマン主義的な要素を考察した。1916年に文壇にデビューした彼女は、当時の女流詩人と同様に装飾的なモデルニスモの作風を嫌って率直な表現を好みだ。“Han venido ...”はロマン主義の重要な要素である<私yo>の称揚(exaltación del yo)を探求する自伝的な物語詩であり、そこには20歳で未婚の母となったことに起因する孤独や虚無感から、夢への自己逃避や過去への郷愁が描かれている。とりわけ、暖かい春を探して飛ぶツバメに<移民>としての自分を重ね、このロマン主義のモチーフに彼女ならではのイメージを描いた。従来のストルニイ研究では、ロマン主義の影響については言及されることは少ないが、本発表では、ロマン主義の手法が彼女自身の経験や心情の表現に適していたことを指摘した。

(2)小林貴徳(三重大学大学院)「豊饒のサン・マルコス—メキシコ、トラバネカ社会における農耕儀礼の一考察—」

メキシコ、ゲレロ州山岳部トラバネカ社会では、自然現象によって作物の出来が左右される農業を行っており、4月25日のサン・マルコス祝日には大規模な農耕儀礼が行われる。本研究では、サン・マルコスが儀礼

で演ずる役割や、カトリック聖人としての属性、超自然的存在との習合に着目したシンボル分析を通じて、当該社会におけるサン・マルコスの意味を検証する。

儀礼が行われる湿地は、生命や水の源泉、動植物の再生産の場として認識されている。水、雷の統御者、穀種を与える英雄としての属性を賦与されているサン・マルコスは、男性原理の表象でもあり、湿地での儀礼では、女性原理を表す「母なる大地」との象徴的結合が表現される。トラバネカ社会における豊穣の原理の一角を成す神格としてサン・マルコスが重要な位置付けにあることは明らかである。

(3)佐々木祐(京都大学大学院)「世紀転換期ニカラグア・『警察的なるもの』と先住民共同体」

ニカラグア共和国はスペインからの形式的独立後も、諸外国とりわけ米・英による霸権争いのもとでの国家編成を余儀なくされた。その際、社会的経済的統合の対象であると同時にその障壁として眼差されたのが、圧倒的多数の「その他」である先住民諸集団であった。そこに生活するさまざまな集団は、なによりもまず労働力と土地の「資源」として規定され、なかば強制的な賃労働への包摂によって、副次的に「国民」あるいは「先住民」として編成されてきたのである。

もちろんこれは、均質で一枚岩的な「国民国家」の形成として進展したわけではない。地域的・社会的・政治的に断片化されたそれぞれのセクターの、齟齬を含んだ複雑な接合過程がそこにはみられる。とりわけ、「中央」から相対的に自立した「周辺」諸地域においては、現場の行政官、地域ボスとその私兵、警察／軍隊といった様々な、相矛盾する諸エージェントの実践により、行為遂行的に法－秩序が形成されていった。この際、それらの諸力の執行対象とされたのは、やはり先住民－共同体であり、またその所有地である。

本報告においては、世紀転換期(1880～1920年)ニカラグア中部高地におけるコン

フリクトの分析を通じ、こうした特異な法・秩序形成の一局面と、そうした諸力との交渉を通じて編成されていった「先住民共同体」のありかたについて考察した。

#### 4. 研究部会開催案内

##### 東日本部会

下記のとおり部会を開催します。奮ってご参集ください。修士論文・博士論文の報告会となります。

日時：2005年3月19日（土）午後2時～5時半

場所：早稲田大学西早稲田キャンパス

14号館10階1060会議室

報告者とテーマ：

###### 《修士論文》

水谷裕佳（上智大学大学院）「現代パスクア・ヤキの民俗誌的研究：『耐える人々』から『選択する人々』へ」

片桐瑞季（筑波大学大学院）「多文化社会における言語政策：メキシコにおけるアイデンティティの獲得をめぐって」

石井登（筑波大学大学院）「カルロス・フェンテスの『イネスの本能』解説：『時間と空間』の概念からの読み」

###### 《博士論文》

睦月規子（拓殖大学）「フリオ・イラススタ：アルゼンチンナショナリズムの30年」

Mutsuki, Noriko, Julio Irazusta:  
*Treinta Años de Nacionalismo  
Argentina*, Buenos Aires, Editorial  
Biblos

連絡先：畑 恵子 hata@waseda.jp

##### 中部日本部会

下記の要領で研究会を開催いたします。

日時：4月16日（土）午後2時～5時

場所：南山大学・名古屋キャンパス・D-22  
教室

報告者とテーマ：

1. 梅本英二（中京大学）「メキシコのテレノベラの世界」

2. 富田 与（四日市大学）「ペルーにおける政治的パトロン・クライアント関係—リマ市エル・アグスティーノ区の事例を中心に」

多くの方々の参加を期待しています。  
連絡先：牛田千鶴 ushidack@cac-net.ne.jp

##### 西日本部会

西日本部会では3月末～4月中旬のいずれかの土曜日に研究会の開催を予定しています。ただいま報告者の募集中です。積極的な参加を期待しております。なお、開催日時その他詳細が決定しましたらホームページおよびメーリングリストにてお知らせいたします。

連絡先：辻 豊治 t\_tsuji@kufs.ac.jp

#### 『ラテンアメリカ研究年報』 バックナンバーについて

学会事務センターの破産に伴い、『研究年報』のバックナンバーが学会に返還され、事務局はじめ関連理事の所属する4研究機関において保管をしております。バックナンバーには若干余裕がありますので、会員の所属する研究機関(図書館等)で『研究年報』のバックナンバーが必要なところには、無料でお分けすることにしました。今回は研究機関に限ります。必要な方は、研究機関を通じて事務局までご連絡ください。抽選となる場合があります。なお送料は着払いとなります。

#### 会費納入のお願い

学会会費の納入はお済みですか。  
まだの方は、下記の郵便振替口座を使って納入してください。

口座名称：日本ラテンアメリカ学会

口座番号：00140-7-482043

(学会事務局)

## 5. 近著紹介

Matsuki, Noriko, *Julio Irazusta: treinta años de nacionalismo argentino*,

Buenos Aires: Biblos, 2004, 238p.

Presentado por Bernardo Astigueta, S.J., Universidad Sofía

Constituida por una diversidad de corrientes inmigratorias Argentina no es un país fácil de comprender, mucho menos cuando la riqueza de sus recursos naturales y la abundancia de manifestaciones culturales, no obstante su corta vida histórica, contrastan con la agitación política del s. XX y el estado de postración económica en que hoy se encuentra. El fenómeno del nacionalismo argentino, una de las facetas relevantes de la vida política de este país, es igualmente complejo como lo demuestra Noriko Matsuki en su obra “Julio Irazusta”, en la que expone la diversidad de expresiones intelectuales que componen este nombre.

La obra de Matsuki es fruto de su tesis doctoral escrita bajo la dirección de Fernando Devoto, a quien debe el prólogo, y defendida en la Facultad de Filosofía y Letras de la Universidad de Buenos Aires en 2001.

El análisis de Matsuki tiene en cuenta la clasificación tradicional de los dos tipos de nacionalismos, uno de derecha (aristocrático, oligárquico, de élite, conservador, católico, “neorreplicano”, etc.) y otro de izquierda (democrático, revolucionario, popular, liberal, “forjista”). En el primero se inscribirían los hermanos Rodolfo y Julio Irazusta, y en el segundo Scalabrini Ortiz y Jauretche. Lo original de la obra consiste precisamente en demostrar la complejidad de ideas en una y otra modalidad más allá de clasificaciones simplistas, e igualmente presentar la fluctuación de posturas en respuesta a las circunstancias. Pero la riqueza de este análisis de “treinta años de

nacionalismo argentino” reside en que al trazar la biografía intelectual de Irazusta, lo hace en diálogo con los representantes de otras facciones, en particular con Jauretche, y mediante una exhaustiva presentación del pensamiento a través de sus escritos.

La obra se desarrolla a través de los temas de mayor interés para la historiografía política argentina tales como la revolución del 30, el antiimperialismo, el revisionismo histórico, el neutralismo durante la Segunda Guerra Mundial, las posturas en relación al fascismo y al comunismo, el peronismo, las naciona- lizaciones, etc.

Matsuki concluye de su análisis que hay un concepto de nación que inspira la historiografía irazustiana: una nación argentina formada durante el virreinato, es decir anterior a la República o Estado. Esta idea que se apoya en la “defensa de la hispanidad” proclamada por Ramiro de Maeztu, ve a América como una prolongación de Europa y hace remontar los orígenes del hombre argentino a la tradición grecolatina. Según la autora, tal imagen de nación responde al tipo “cultural” y “étnico” más que contractual, ignorando así el componente indígena y –paradójicamente– minimizando la particularidad local. Igualmente, llega a la conclusión de que las corrientes nacionalistas se distinguen más por diferencias generacionales que por componentes apriorísticos. Por último, opina que el nacionalismo de Irazusta contiene componentes autoritarios de tipo defensivo producto de un complejo de inferioridad.

## 6. 海外のラテンアメリカ関係学会のお知らせ

### ○CELAOおよびFIEALC時期大会のお知らせ

CELAO - Consejo de Estudios Latinoamericanos de Asia y Oceanía(ラテンアメリカ研究アジア・オセアニア審議会)の第1回大会が今年7月に、FIEALC - Federación Internacional de Estudios sobre América Latina y el Caribe(ラテンアメリカ・カリブ海研究国際連盟)の第12回大会が今年9月に行われます。昨年のFIEALC大会実行委員会を母体に、日本FIEALC/CELAO委員会(CJFC、Comisión Japonesa para FIEALC/CELAO)が発足し、日本ラテンアメリカ学会からも会員研究者の国際交流を促進するという目的のため、逕野井茂雄理事長と山崎真次次期大会実行委員長が委員会に参加をしています。

両大会の主催者は、日本からの積極的な参加を期待していますので、奮って参加をしていただきたく、お願いします。とくに学会次期全国大会での発表者各位には、メルボルンと/またはローマでも、スペイン語、ポルトガル語、英語での発表を行っていただきたく思います。

(山田睦男)

※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※

#### 第1回 CELAO - Consejo de Estudios Latinaamericanos de Asia y Oceanía (ラテンアメリカ研究アジア・オセアニア審議会大会)

日 時：2005年7月14～16日

主催機関：ラトローブ大学ラテンアメリカ研究所(メルボルン)ILAS-Institute for Latin American Studies, La Trobe University

連絡先：Prof. Barry Carr, Director,

ILAS(実行委員長)

Fax:+61-3-9479-1942

Tel: +61-3-9479-2038

Mail: b.carr@latrobe.edu.au

ホームページ：[www.latrobe.edu.au/latinamerican/ilas.html](http://www.latrobe.edu.au/latinamerican/ilas.html)

(大会関係記事、登録方法など近日中に掲載の予定)

登録方法：規定、申し込み用紙を取り寄せ、個別申し込み。(ワークショップへの参加申し込み締め切りは6月1日、個別報告の申し込み締め切りは6月10日。詳細はホームページを参照のこと)。

(なお、12ページに実行委員会本部からの呼びかけ文を掲載しましたのでご参考ください。)

第12回FIEALC - Federación Internacional de Estudios sobre América Latina y el Caribe (ラテンアメリカ・カリブ海研究国際連盟)大会

日 時：2005年9月27～30日

メインテーマ：América Latina y el proceso de modernización(自由論文可)

主催機関：イタリアー ラテンアメリカ研究所(ローマ)IILA-Istituto Italo-Latinoamericano

連絡先：Dr. Riccardo Campa(実行委員長)

Fax: +39-6-8620-6298

Tel: +39-6-6849-2210

Mail: [fiealc2005@iila.org](mailto:fiealc2005@iila.org)

ホームページ：[www.fiealc2005.org](http://www.fiealc2005.org)

登録方法：ホームページ経由ないしファックス

### ○LASA 2006年大会のお知らせ

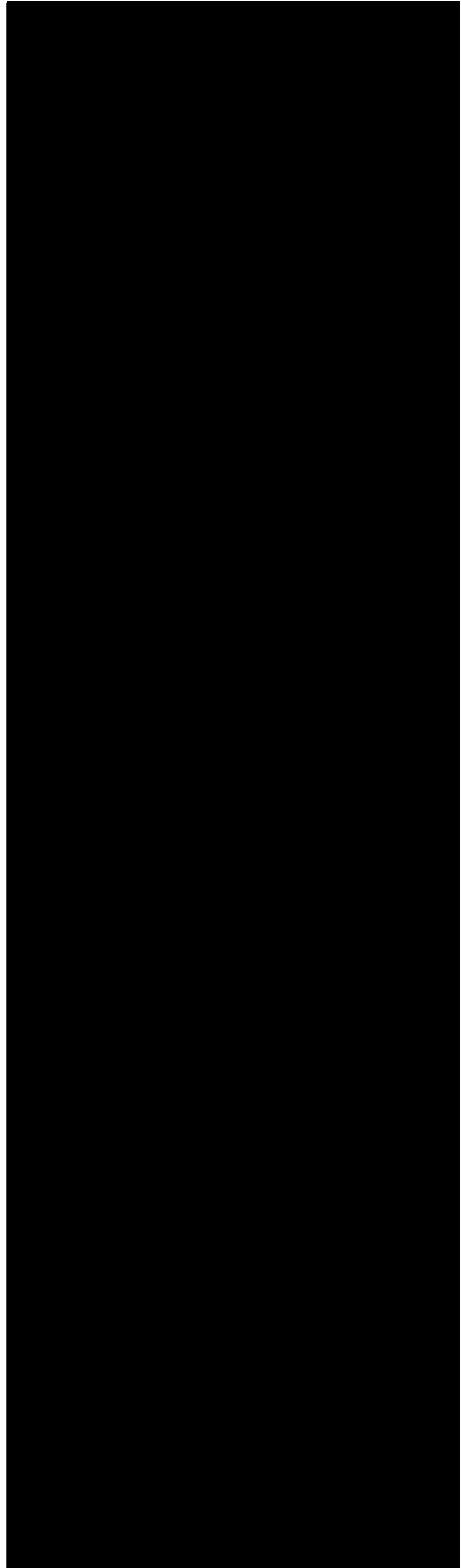
LASAは次期国際大会を2006年3月15～18日の予定でサン・ファン(ブルトリコ)で開催する。ラテンアメリカ研究の発表の場はこれまで米国中心の傾向があった。2006年大会では、ラテンアメリカ研究の一層の「脱中心化」(de-centering)とトランスナショナリゼーションをめざし、幅広い分野と地域からの参加を呼びかけている。現在LASA事務局では報告申し込みの募集を行っている。

オンライン(<http://lasa.international.pitt.edu>)で報告申し込み用紙は入手可能。会員諸氏の積極的な参加が期待される。報告希望者はe-mail添付ファイルにてLASA

事務局 (lasacong@pitt.eduまたはlasa@pitt.edu) へ2005年4月1日までに送ること。  
セッション形式にはパネル、ワークショップその他がある。各分野 (Program Tracks) と責任者リストはウェブ上でも確認可能。  
なお、報告者は2005年と2006年にLASA会員であることが条件付けられている。

## 7. 事務局から

### I. 会員関係 (a b c順)



## II. 寄贈図書

- 今井圭子編『ラテンアメリカ 開発の思想』日本経済評論社 2004年
- 上智大学イペロアメリカ研究所『イペロアメリカ研究』第XXVI卷第1号 2004年度前期
- 上智大学イペロアメリカ研究所『イペロアメリカ研究』第XXVI卷第2号 2004年度後期
- Mauro Neves "Telenovelas: Realidade e Sonho na América Latina," 上智大学イペロアメリカ研究所、LAMSシリーズ No.14
- 『マヤ・イメージの形成と消費に関する人類学及び歴史学的研究』(平成14~平成16年度科学的研究費補助金・基盤研究(B)  
(1)研究代表吉田栄人 研究成果報告書)  
2004年2月
- Matsuki, Noriko, *Julio Irazusta: treinta años de nacionalismo argentino*, Buenos Aires:Biblos, 2004
- 泉邦寿・松尾弎之・中村雅治編『グローバル化する世界と文化の多元性』上智大学 2005年
- 松本八重子『地域経済統合と重層的ガバナンス—ラテンアメリカ、カリブの事例を中心に—』中央公論事業出版 2005年

## 地域研究コンソーシアムについて

地域研究を推進するネットワークである地域研究コンソーシアム(Japan Consortium for Area Studies)が、昨年4月26日に設立され、日本ラテンアメリカ学会も前理事会の下で参加を決定しております。大学付属研究所・センター、大学院研究科、COEプロジェクト、NGOなど市民組織と地域研究学会を加え、12月16日現在で、全国で59の組織が加盟をしています。統合的な地域研究の展開、教育の推進と次世代研究者の育成、社会への知的貢献など、地域の壁を超えた研究を推進し、社会的な役割を果たすことを活動目標としています。組織的にも体制が整備され、昨年はアンブレラ・プログラム型の公募研究4件、交流支援プログラム30件など、すでに具体的な研究活動が動き始めました。12月17日には参加組織と一緒に会した年次集会が「学会と地域研究」をテーマに学士会館で開催され、

当学会からは理事長が参加しました。地域研究と分野別研究、専門性と学際性、文理融合等について、その可能性と課題をめぐり活発な議論が出されました。

今後、コンソーシアムとの協力関係を通じて研究情報を共有し、そのネットワークの中で連携的な活動を推進することが当学会の発展のためにも重要であると考えられます。今後は、コンソーシアムの活動情報について関連するものは、Eメール配信、会報等の手段を通じて適宜、会員各位にお知らせをするとともに、当学会が関与するプログラムについては、会員諸氏の積極的な参加を呼び掛けることになりますので、ご協力をお願い致します。

また、コンソーシアムの活動に関する情報は、ホームページをご覧ください。  
(<http://www.jcas.jp/>)

## 沖縄で米州開発銀行年次総会開催へ

米州開発銀行（IDB）の第46回年次総会が4月6日から12日の予定で、沖縄県宜野湾市のコンベンション・センターを会場に開催される。1991年4月の第32回名古屋総会以来、日本で開かれるのは14年ぶり。今回は、アジア諸国として2番目となる韓国が新規加盟する。

10日から12日に加盟各国の政府代表による本会議が予定されており、新融資スキームなどについて議論されるほか、ラテンアメリカ諸国とアジアとの経済関係、海外労働者からの送金、ミレニアム開発目標などが焦点となっている。

本会議に先立って6日からはIDB主催の公式セミナーが始まる。「水資源とミレニアム開発目標」（6日）、「国際化時代の送金と移民」（6日）、「ラテンアメリカ・カリブ海地域とアジアにおける科学技術、革新と競争力への戦略」（7日）、「ミレニアム開発目標：アジアとラテンアメリカ

カ・カリブ海地域のベストプラクティスの共有」（7～8日）、「世界経済の中でのラテンアメリカ・カリブ海地域とアジア：更なる地域間経済連携にむけて」（8日）、「新興経済地域における脱ドル化戦略と国内債権市場」（8日）、「中米とドミニカ共和国への投資機会」（9～10日）。

参加希望者は事前登録が必要。なお、IDB沖縄総会では、当学会が団体として登録されている。事前セミナーを含め、参加希望者はコード番号とパスワード（学会メールでは添付ファイルで配信済み）を使って登録することができる。詳細については、IDB駐日事務所（電話03-3591-0461）ないし学会事務局に問い合わせを。また、以下のHPも参照されたい。  
IDB：[www.iadb.org/exr/am/2005](http://www.iadb.org/exr/am/2005)  
駐日事務所：[www.iadb.org/japan](http://www.iadb.org/japan)

沖縄実行委員会：

[www.idb-okinawa2005.jp](http://www.idb-okinawa2005.jp)

## 編集後記

インド洋スマトラ沖大津波惨事の中での年明けとなった。地震、津波の被害はラテンアメリカ地域でも過去多くあった。天災・人災に対するグローバルな国際支援の取り組みが急務となっている。さて、迎えた今年は国際会議目白押しである。日本のラテンアメリカニストも日本一米州という活動領域を超えて広く交流すべき時代に突入している。欧州やオセアニア地域でも、地域を越えてラテンアメリカ研究者が切磋琢磨できるネットワークが形成されつつある。これを機会にわれわれも積極的に発信したいものである。また、LASA次期大会がめざすように、米国中心型ラテンアメリカ研究から脱皮すべき時代も迎えている。本学会の次期大会への会員一人ひとりの取り組みが、その一歩につながればと期待したい。

幡谷則子

### 前号の訂正とお詫び：

前号で故 滝本道生会員のお名前の表記が再度誤っておりました。心よりお詫び申し上げます。

No.86 2005年3月7日発行

### 学会事務局

筑波大学大学院人文社会科学科研究科

現代文化・公共政策専攻

逕野井 茂雄研究室

〒305-8571 つくば市天王台1-1-1

T E L 029-853-6534

F A X 029-853-6502

E-mail : osonoi@social.tsukuba.ac.jp

**I CONGRESO INTERNACIONAL DE CELAO**  
**(Consejo de Estudios Latinoamericanos de Asia y de Oceanía)**  
**La Trobe University, Melbourne, Australia, 14, 15, 16 de julio de 2005**

Con esta ocasión celebramos la reunión inaugural de una nueva asociación y red de estudios latinoamericanos en los países de Asia y de Oceanía. Formada en Osaka en septiembre de 2002, CELAO pretende construir un foro de discusión para los latinoamericanistas de nuestra región (Asia y Oceanía) y para los investigadores latinoamericanistas del resto del mundo.

Esperamos reunir a un buen grupo de investigadores de China, Japón, Taiwán, Filipinas, Corea del Sur, Indonesia, Australia y Nueva Zelanda y también de Estados Unidos, América Latina y Europa.

Por tales motivos, abrimos la presente **convocatoria** a investigadores y especialistas para presentar trabajos sobre temas de las ciencias sociales y de las humanidades.

#### **BASES**

- 1.- Pueden inscribirse mesas de discusión completas, alrededor de un tema específico, o trabajos individuales que serán insertos dentro de las mesas que se vayan formando conforme se reciban las respuestas a la presente convocatoria.
- 2.- Enviar resumen o abstracto en una cuartilla (1,500 caracteres), que incluya de cuatro a seis palabras clave.
- 3.- Se aceptarán propuestas de mesas de trabajo hasta el 1 de junio del 2005.
- 4.- Las propuestas individuales de ponencia tienen como fecha límite 10 de junio de 2005.
- 5.- Los trabajos podrán exponerse tanto en español como en inglés.
- 6.- Cubrir la cuota correspondiente.

Cuota de inscripción para ponentes, hasta el 24 de junio de 2005 **120 USD**

Cuota de inscripción para estudiantes de posgrado debidamente acreditados **65 USD**

El pago de inscripción incluye papelería, una comida diaria durante el evento, servicio de té y café, y publicación del trabajo en la memoria electrónica del Congreso.

El pago de la cuota se deberá hacer en cualquiera de las dos opciones siguientes:

#### **Pagos dentro de Australia**

Enviar un cheque o Postal Order a nombre del Institute of Latin American Studies (ILAS) a la siguiente dirección.

#### **CELAO Conference**

ILAS (Institute of Latin American Studies)  
La Trobe University  
Bundoora, Victoria, Australia, 3083

#### **Pagos desde el exterior**

Enviar un International Postal Order a la dirección de ILAS arriba citada. Habrá también la posibilidad de pagar con tarjeta de crédito. Ver la página web de CELAO conectada a la página web de ILAS-La Trobe.

Para el registro de participaciones e información general, puede comunicarse con **Barry Carr, Coordinador del evento**, al teléfono **+61 3 9479 2038**, por correo electrónico a **b.carr@latrobe.edu.au** o al fax **+61 3 9479 1942**

#### **Comité Organizador:**

Barry Carr, Steve Niblo  
Ralph Newmark, Rowan Ireland  
Melbourne, Australia